

エネルギー環境学習絵本「はじめまして ほうしゃせん」制作に寄せて

2014年10月

秋津 裕

絵本を企画・制作した原子力安全システム研究所（INSS）は20年以上にわたって、小学校から高校までのエネルギー環境教育を長年研究し、学校教育の中で一定水準の教育が行えるよう教材を開発し普及に努めていらっしゃいます。私が2010年に実践した幼児向け放射線学習会を機に絵本化のご提案をいただき、2013年春、発行の運びとなりました。

絵本のねらいは「放射線を知る」です。この絵本が出てから必ず頂く質問が「幼児に放射線が理解できるのでしょうか」です。小学校入学前後の学習指導において、学びの達成を表す言葉は明確に異なります。文部科学省幼稚園教育要領では理解するという言葉を使わない替りに、「気づく」「関心や興味を持つ」「味わう」という表現で保育が行われます。幼児にとっては何もかもが「はじめて」の出会いだからです。例えば人と「はじめまして」と出会った時にその人を理解するとは言わないでしょう。放射線学習も同様でまず出会い、知ってみようという位置づけにしました。

放射線教育で子ども達へ伝えたいことはたくさんありますが、言語の種類や量の少ない幼児が初めて放射線に触れることを考えますと、限られた文字と絵だけでは伝えきれない内容や数字の意味などについては全て削ぎ落とし、見開き二頁に取り上げる話題はひとつとしました。

最も配慮したことは言葉選びです。この絵本から何かを学ぶというよりもどのような印象を届けられるか、を言葉選びに込めました。短く耳に優しい言葉と文章で、放射線の姿をできるだけまっすぐに届けることに専心しました。特に作者の主観が反映する形容詞や副詞は極力使用しないように努めました。このようにしながら文科省放射線出前授業¹で挙げられた小学生指導ポイントを押さえ、原子力発電所事故にも触れました。これからは原子力災害リスクも含めて、今後の日本のエネルギー選択を考えなければならないと思うからです。

絵本の各頁端には読み聞かせをするおとな向けにコラムを添えました。この解説コラムについては巻末や別刷を設けるのはどうかというご意見も頂きましたが、私は子どもへの読み聞かせとおとなへの知識提供の同報を重視しました。放射線を学びそびれた世代へ届けるためには、子どものために開いた絵本の頁の傍らに短いコラムがあることが重要であるとこだわりを持っています。絵本内のおとな向けのコラムの数字の情報には若干古いデータもありますが、取りまとめ元を統一させるために文科省放射線副読本（小学校教師用、平成23年10月）から引用しました。

小さい子ども達へ放射線を伝える方法は、子ども達に語りかけ彼らの言葉を拾いながら、大切なこと、気をつけること、これから考えていくことなどを話すことが良いでしょう。絵本はあくまでもそのきっかけであり決して参考書のようなものではありません。絵本を通じて子ども達に「ほうしゃせん」という言葉が少しでも記憶に残り、子ども達なりに印象を持ってその後の学校授業に臨んでくれたらと願っております。

¹ 公益財団法人 日本生産性本部エネルギー環境教育情報センター、平成23年度「どこまで知ってる？放射線」放射線等に関する出前授業で教えるべきポイント（2011）